

Title	ニーチェにおける〈子供〉の生成：〈子供〉の道徳・身体・産出
Author(s)	阪本, 恭子
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41329
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について〈/a〉をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	坂本 恭子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 14312 号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科哲学哲学史専攻
学位論文名	ニーチェにおける〈子供〉の生成 —— 〈子供〉の道德・身体・産出
論文審査委員	(主査) 教授 中岡 成文 (副査) 教授 鷲田 清一 教授 溝口 宏平

論文内容の要旨

本論文は、〈子供〉をめぐるメタファー群を基本にして、力への意志に集約されるニーチェの中心思想を解明しようと試みたものである。

まず序論では、ニーチェが精神の比喩として〈子供〉をしばしば使用すること、子供がツァラトゥストラ＝ニーチェの課題として残っていたことが指摘され、ニーチェにとっては比喩という表現形式が概念的言語より優先することも明らかにされる。しかるに、従来のニーチェ研究史では、たとえ子供を解釈の中心には据えていても、なぜ子供の比喩が語られ、どのように従来の哲学の克服につながっていくのかは十分に説明されていない。そこで、本論文では「如何にしてひとは〈子供〉となるか」が主題として探求される。

第1部「道德」では子供とは「負い目なきこと」とであると論じられる。主人道徳における「負い目なきこと」は、すべての社会的拘束からの自由である。これに対して奴隷道徳は、従来の貴族的価値を逆転して「価値の転換」をなしとげ、「力への意志」へと高揚せしめる創造的作用のひとつと考えられる。ここから、第二の負い目なき、すなわちキリスト教の意味での神が否定され、負い目が自己破壊されることを経て、すべての負い目からの解放が生じなければならない。この段階に至れば、すべての目的は否定され、結果はつねに必然的であるから、生成に負い目はない。つまり、道徳以後あるいは道徳外的状態となっている。生成の三段階の比喩でいえば、新しい価値創造が可能なのは、汝なすべしへの服従(駱駝)とそれに対する聖なる否定(獅子)とを肯定して併せもつ、聖なる肯定としての子供においてのみである。善悪の彼岸とは、このような子供の精神が見出される場である。

第2部「身体」では、精神は命令し、自らの意志で行為するという仕方では身体に服従することが強調される。この点に関連して、ドゥルーズの見解が批判的に検討され、受動性こそ能動性に対応する力の質であり、ニーチェにおける力の意味を理解するのに重要であると指摘される。子供は獅子の「我欲す」を超え、服従する自我、支配する自我を否定しなければならない。なお、ハイデガーは力への意志を形而上学の中に位置づけているが、本論文はピヒトとともにそれに反対している。

第3部「産出」では、ニーチェにおける、母そのものから「母的なもの」への移行が指摘され、ニーチェ自身が産む母としての女であろうとしたと論じられる。各人が生の全体的過程そのものである一人一人の個人は、そうすることで何が生成するか、何が生じるかに関しては無知でありながら、あるものを探求する。そこで求められているものこそ、「理想的な利己心」における自己なのである。こうしてニーチェは、非利己的なもの、つまり一つの自我の中

の人格（仮面）の多様性を持ち出すが、そこに投影されているのは、われわれを深い無一責任の感情でもって支配する「生成するもの」への畏敬である。本論文の結びでは、哲学的パトスに基づいて哲学を産出すべき「われわれ」こそ、子供を媒体として可能になった他人との交わりであると明らかにされる。われわれとは、自らが誰であるかをまだ知らないかのように振る舞い、自らの無知を非知としてたえず捉え返さなければならない者なのである。

論文審査の結果の要旨

女性、妊娠、産出という、広い意味でのジェンダー的観点を備えた取り組みは、ニーチェ研究の中でまだ類が少ないと思われる。本論文は、ニーチェの主要テキストの堅実で綿密な読解をもとに、〈子供〉のメタファー群を分析していく形でその取り組みに参加している点で固有の着眼を示しており、それだけでもすでに小さからぬ貢献をニーチェ研究に対してなしているといつてよい。さらに、その分析作業の過程で本論文はさまざまな研究成果を示したが、そのうちでも、ニーチェの思想における否定性のメカニズムへのきわめて細やかな理解が特筆に値する。すなわち、病者の光学、駱駝の精神や奴隷道徳など、一見するとたんなる受動性として否定的にのみ叙述されているように思われる事柄が、じつは「受動の中の能動」を生み出す決定的な展開の契機として、力への意志のこの全体的プロセスのために不可欠で重要な位置を占めていることが、鋭く浮き彫りにされているのである。ドゥルーズの見解に抗して、ニーチェにおける否定性の契機が浮き彫りにされた結果として、これをたとえばヘーゲル弁証法における否定性と比較し、否定性の問題系の哲学的射程を明らかにする通路が開かれたことを、本論文の大きな研究成果のひとつにあげてよいであろう。

以上のような優れた成果にもかかわらず、若干の疑問点が残らないわけではない。たとえば、なにゆえに〈子供〉のメタファー群を考究することがニーチェの中心主題の解明にとって不可欠であるのかという方法論上の論点は、いくつかの注意深い立論にもかかわらず、結果において十二分に立証されているとはいいがたい。また、力への意志という中心概念につながる「意志」の理解に関しても、疑問が残らないわけではない。ニーチェは真理概念は批判しても、真理を形成する「意志」は再評価したのだという本論文の指摘は鋭いと思われるが、ニーチェは基本的には意志の形而上学を出ていないというハイデガーのきわめて射程の大きい解釈に、十分対決したうえでその指摘がなされているとはいいがたい。

しかしこれらの問題点は、本論文が切り開いた地平上でこそさらに綿密な考究が可能となる類のもので、本論文のすぐれた成果を損なうものではない。よって、本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。